# 悪役≪ヒール≫の花道

全信全疑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
悪役≪ヒール≫の花道

【Ｎコード】
Ｎ３６７６Ｊ

【作者名】
全信全疑

【あらすじ】
これだけは言わせ欲しい。あまりにも正義が強すぎたと

これは、正義が強すぎた世界。
正義のインフレが起こった世界。
正義が溢れかえった世界。
悪は歯がたたない世界。
悪のデフレが起こった世界。
悪は存在すら許されない世界。

そんな世界に俺は登場した。
悪の、最後の切り札として―

注）切り札とありますが主人公最強設定ありません

## はじめに　（出来れば読んでおいて下さい）

初めての方ははじめまして。作者のもう一つの作品を読んでくれている方はこんにちは。そしてみんなにごめんなさい。まだ完結もしていないのにもう１作品投稿し始めました。

言い訳としては、あちらの方を書いている時に息抜きでいろいろな設定をだらだらと徒然なるままに書いていました。そんなときにあることがきっかけで短編を書いてみようと決意しました。そしてどうせなら今書いているのとは全然違うジャンルで行こうと書き溜めた設定をあさっていったらそれが楽しくて話が膨らむわ膨らむわ（笑。結局書ききれなかったので書けた分だけでも載せていきたいなぁと。それで載せました。

更新頻度は始めは書き溜めした分があるので早いかもしれませんが、メインはもう１つの方ですので基本は遅くなると思います。この話の設定が設定ですし（汗。でもちゃんと完結はさせます。

もう１つの方を楽しみにしてくれている方（いるといいなぁ（笑））は「ちゃんと１つを終わらせてから次行けよ！」と怒っているとは思いますが、これを書いていることで向こうが疎かになることにはしませんのでどうかご勘弁を。

一応この作品について言っておくと、今までにない感じに仕上げていくつもりです。え？見たことある？その意見スルーします（笑。そして、某ホラー映画みたいなえぐかったりグロかったりするいわゆるＲ－１５指定な展開はないつもりです。ですが、殴られて骨が折れたり切られて血が出たり等の痛々しい感じの描写はあります。ご想像の通り戦闘ありますので。あと、あらすじにも書いてありま

すが主人公最強設定ではありません。ここは声を大にして言っておきます。念には念をってやつです。

最後に、結構やりたい放題すると思いますので感想・レビューして頂けるとすごい有り難いです。今後の参考にします。批判や指摘、低評価、何でも大歓迎ですので。でもマゾというわけではないです（笑

ではでは。

# 序章　悪の切り札の生まれ方

ふと、目を開けるとそこは真っ白い空間だった。自分はどうやら仰向けに倒れていたらしい。起き上がって辺りを見渡すが、何もないし誰もいない。ただただ白いペンキをぶちまけただけのような、真っ白の世界が広がっているだけだった。何で俺はこんなところにいるんだ？と疑問に思ったときようやく気づいた。

「・・・・・あれ？俺は、誰だ？」

自分のことが思い出せない。名前どころかついさっき起きるより前の一切の記憶がなかった。

「記憶、喪失・・・・・って、やつなのか？」

だけどいくら思い出そうとしても全く思い出せないし、よくあるかはモヤがかかっているとか頭痛がするとかそんなことは一切ない。記憶を失ったというよりはもともとなかったってオチの方がしっくりくるぐらいだ。まあそれが記憶喪失だって言われたらそれまでだけど。いくら考えようが悩もうが少しも情報を捻り出せない俺はイライラしてくる。

「・・・・・気分転換に散歩するか」

無いものはしょうがない。と、割り切れはしない。だけど、今は記憶がないことに嘆くよりこの訳がわからない状況をどうにかすべきだと結論づけ、回りに誰かいないか。もしくは何かないかと探し回る意味を兼ねての散歩だ。あれだ。ポジティブ万歳だ。そう頭を切り替えて俺はとりあえず歩き出した。

「にしても、見事に何もないなぁ」

見渡す限りの真っ白な景色が広がっている。さらには言った通り見事なほど何も無いので方向なんて全くわからない。なのでとりあえず前に歩いていたわけなのだが、ふとあることを思いたって立ち止まり叫んでみた。

「おーい！誰かいませんかー！」

黙ってみる。物音一つしなかった。集団シカトされたらこんな気分なのだろうか。叫んだ声すら返ってこないということは、よっぽど遠くまで遮蔽物はないということだ。だんだん不安になり、どうしたもんかなぁと再び悩む俺。

「ジリリリーン。ジリリリーン」

そんなとき、後ろから電話の音が聴こえてきた。

「ん？」

振り向くすぐとそこにはついさっきまでは無かったはずの巨大なスクリーン。そのスクリーンの中にある小さな机の上でこれまた小さな電話が鳴っていた。明らかに異常事態の発生だ。発生なんだけど・・・

「・・・・・えーっと、俺にどないせぇと？」

思わず誰もいないのに尋ねてしまった。あまそれくらい反応に困ったってことだ。だって目が覚めたら記憶が無くて、真っ白な空間に巨大なスクリーンがぽつんとあって電話が鳴ってる映像が流れている。あれか？何かのドッキリか？だとしてもスクリーン上の電話はないだろ。だって当然電話にでるなんてこと出来ないわけだし。

「ジリリリーン。ジリリリーン」

そんなこと考えてる間もスクリーン上の電話は鳴り続けている。回りを見渡してみても他に増えたものはないようだ。

「まあ他にすることも無いしな・・・・・」

そう自分に言い聞かせ、俺はとりあえずその映像を座って眺めることにした。この映像に先があることを祈りつつ。

一五分後。

「ジリリリーン。ジリリリーン」

そこには俺の祈りも虚しく相変わらず電話が鳴り続ける映像があった。それを未だ三角座りで見続けている俺。・・・・・うん、当たり前の如くもう飽きた。だいたい五分もかけ続ける方も方だし、放置し続ける方も方だろ。いや留守っていう設定なら知らないけどさ。だとしてもなら１０コールぐらいで留守電にする心使いをしろよ。この映像撮影者の意図がわかんない。・・・・・やべぇ、俺気が付いてからの半分以上が愚痴だ。自分で思っている以上に気が滅入っているようだ。

「このままだとストレスでハゲるな俺」

鳴り続ける電話をよそに、無意識に頭が下を向きぽつりと言葉が零れた。

『個人的にはバーコードにして耐え忍ぶより、思いきってスキンヘッドにした方がいいと思うんだ』

そして誰かの声が聞こえた。はっとなって顔を上げる。すると画面の右側からアルマジロが歩いてきていた。

「・・・・はい？」

そう、あの動物のアルマジロがだ。アニメとかじゃなくて本物のリアルなアルマジロ。そして声は子供の声で、性別は声のトーンから多分オス。正直ちょっと引いた。そんなアルマジロさんは真ん中までくると

『そりゃっ』

という掛け声で回し蹴りを放って机ごと電話を映像の外側へと弾き出した。

「いや、でないのかよ！？」

散々人にあんな映像を見せておいてこんなオチかよ！

『うん、ベタだけどスピードがあるいいツッコミだね。でも僕は「見事な回し蹴りですね」とかシュールなツッコミの方がよかったかな？』

「立って喋ってるアルマジロがこれ以上シュール求めるなよ！ぐだぐだになるだろ・・・」

あと「うが」と残り二文字言えばツッコミが終わるというときに気付いた。俺、今完全に会話してたよな。ということはこれはリアルタイムの映像ってことか？
『むっ、ツッコミの途中で止まるのは減点対象だよ。でも僕は優しいから挽回のチャンスをあげよう』
何やら背中を向けて屈み込み、もぞもぞと何かをしてからこちらを向くとアルマジロは髭メガネをしていた。ほら、あの昭和に流行ったようなベッタベタのパーティーグッズの一つ。
『ほらっ、どこからでもツッコミ入れてよ？』
そう言ってリアルでちょいグロなアルマジロがヒゲメガネをつけて首を傾げながらこちらをじーっと見てくる。
「ああ、えーっと、俺はバーコード派です。例え少なかろうと見苦しかろうと誇りは誇りです」
なんかあれに触れたら負けな気がしてあえて触れないことにした。
『いや、ここで髪の話蒸し返してどうするのよ。時間差にしては時間経ちすぎでしょ？』
「んじゃ、アルマジロって二足歩行出来ましたっけ？」
『これが出来ないんだよ。おかしいよね。でもそれさっきツッコミかけたやつだよね？だったらそんなのダメに決まってるでしょ』
「はあ、すみません。さっきシュールなのが好きって言ってましたので」
『それはツッコミの場合。ボケがシュール求めてどうするんだよ・・・・はあ、君にはがっかりだ』
オーバー気味にがっくりと肩を落とすアルマジロ。これくらい常識でしょ？などとぶつぶつぼやいている。
「なんか期待にそえなくてすみません。自分記憶喪失らしくて常識が足りてないみたいなんですよ」
それを何故か申し訳なくなって謝ってしまう。あと言うならいつの間にか敬語で話してた。スクリーン上で落ち込むアルマジロとそれを見て頭低くして謝罪する俺。奇妙を通り越して異常な光景だろう

な。
『そりゃそうだろうね。逆に記憶が残ってた方が驚くよ』
髭メガネをはずしながら落ち込んだアルマジロさんがいう。
「へ？俺のこと知ってるんですか？」
即座に聞き返す。
『もちろん。ここに連れてきたのも僕達だしね』
アルマジロさんが元気を取り戻し、胸を張ってちょっと自慢気に話す。
「俺ここに連れてきたってことはお前が犯人かよ！？目的は何だよ！？あっ、やっぱそれはいいから早くもとの場所に帰してくれ！でもなくてその前に何で俺は記憶がないんだってより記憶返してくれ！・・・・っていっても返せるようなものでもないだろうしあーもー！！」
自分の頭をぐしゃぐしゃと両手で掻きむしる。いろんな情報のオンパレードで頭かパンクしそうだ。
『君の言うことはもっとだね。だけど僕にも訳があったんだ。だからまずは僕の話聞いてくれない？そのあとで僕の知ってる範囲の質問なら全部答えるからさ』
「・・・・・わかりました」
正直ふざけるなってのが本音なんだけど、現状でいうと相手の方が圧倒的有利だ。こっちは情報ゼロだしアルマジロが喋ったり訳のわからない異常な空間（？）におかれたりでパニックだ。だからわざわざ相手が下手に出て来てくれてるんだから今はのっておこう。という訳でとりあえず再び敬語にもどして了承したのだ。
『よしっ。じゃあちょっと待っててね』
そう頷くとアルマジロは俺の返事も待たずに画面の右へと消えて行った。俺はちょっと自己中なアルマジロだなぁと思いつつ黙って待った。
『ある世界ではさ、正義のヒーローがいて悪の秘密結社があったんだ』

するとアルマジロの声だけが聞こえてきた。当然俺は「これは何かの物語か？」とか「俺をここに連れてきたのといったい何の関係があるんだよ？」とか思ったんだけど、話を聞くことを了承した手前話に割り込みづらく、とりあえずは我慢して黙って聞くことにした。

『ヒーローと悪は戦いを繰り広げたんだけどね、強さの比率は６：４で正義が勝っていたんだ』

そして右から現れたのはアルマジロの大きさの四倍はある黒色のスロットらしき、上・中・下に枠がある機械。それをアルマジロは横から押しながら持ってきた。

『でもね、悪はそれに対して数で勝負した。次々と戦闘員を増やすことでその差を補っていたんだよ』

真ん中に着いたアルマジロさんはふぅっと一息ついて話を続ける。

『そしてある事件が起こったんだ。“正義のインフレーション”が』

雰囲気が少し変わった。

『詳しい説明は今回あんまり関係ないから省くけど、読んで字の如く正義のヒーローが急激に増えたんだよ。悪は数で対抗してようやくイーブンだったのにその数すら敵わなくなったんだ。それにこっちが増やしていたのは戦闘員であってヒーローみたいに単体で強い主戦力ってわけじゃないしね』

なるほど。確かにイメージだと正義のヒーローは一騎当千で、悪でいうショッ〇ーみたいな立ち位置のヒーローは珍しいもんな。だけどここで一つ疑問に思うことがあった。まあ気のせいか？と話に耳を傾ける。

『これでもう戦力差は歴然。悪の殲滅は時間の問題だと思われていた。それでも悪は追い詰められながらも起死回生の一手を虎視眈々と狙っていた。そんな時だった。一人の正義のヒーローが現れたのは』

聞いているうちにやっぱりおかしいという思いが再びわき上がってくる。

『名前は“Ｃａｌｌｉｎｇ Ｅｎｄ”。終わりを呼ぶ者なんて大それてるしヒーローっぽくない名前だよね。でもね、そのヒーローは名前負けしないほどの圧倒的な強さだったんだ』
その疑問は話が進むにつれだんだん大きくなっていった。
『そのヒーローの登場により一瞬で悪はやられましたとさ。めでたしめでたし、と』
そして俺の疑問は解消されないままアルマジロの話は終わった。
「すみません。質問いいですか？」
『どうぞどうぞ』
だから俺は聞いた。
「その話、というか物語？だと少し変ですよね？今の流れだと、普通なら悪が勝って正義が負けそうになった時にその終わりを呼ぶ者さんが現れるか、正義が勝って悪が負けそうになってる時に悪側にすんごい強い奴が現れるもんなんじゃないんですか？」
だってそうじゃないと物語的に全然盛り上がらないし。いや、その話がノンフィクションなら普通にありえるけど。というかヒーローやら悪やらそんな日曜の朝からやってるアニメみたいな状況が存在するっていう一番ありえないことに目をつぶった場合だけどな。
「それに今の話だと少し悪側の視点になってません？」
途中のくだりで『そしてある事件が起こったんだ。“正義のインフレーション”が』ってあったけど、正義のインフレーションってことはかなり正義が増えたんだからいいことだよな？それだけ戦力が増えるってことだし。なのに事件って言い方はおかしい。普通なら幸運とかついてる出来事っていうだろ。
『おっ、すごくいいところに目がついたね。まあこれが物語なら山なしオチなしだからね。でも君が既に気付いてるかもしれないけど、この話では三つ付け加えることがあるんだ』
と言ってアルマジロさんは右の前足（右手？）を出して恐らく一本指を立てた（つもりだろう）。
『一つ目。この話は僕の世界で起こったノンフィクションの話って

ことだ』
『二つ目。この話は現在進行形ってことだ』
『そして最後。実はこれが一番重要なんだけど、僕・・・・・。』
しっかりと五秒ほどためた後、
『悪側の人間なんだ』
アルマジロは言った。
「は、はぁ」
とりあえず生返事を返した俺。ぶっちゃけもう頭が痛くなってきた。もちろんアルマジロが自分を人間として扱ったことではなく、悪側の人間だと言ったことにだ。だって今時のご時世で悪やら正義だよ？さっきも思ったけど、そんな世界全く信じられないし。まあ記憶喪失の俺が言うのもなんだけど、一般常識までは失ってないみたいだからこの考えは間違っていないだろう。それにもし仮に百歩譲ってそんな世界があったとして、記憶喪失な俺がこんな真っ白な訳わからない場所でスクリーンごしに二足歩行の（自称）喋るアルマジロが悪だと名乗ってくる。もう勘弁して早く記憶を戻してもといた場所へ帰してくれってのが本音だ。
『あーやっぱり信じてないねぇ。まあいいや、とりあえず話を進めるよ？』
そう言ってアルマジロは軽く咳ばらいをする。
『さっきも言ったけど悪は滅ぼされてしまったんだ。表面上はね』
「表面上？」
『うん。悪も馬鹿じゃないからね。勝ち目がないと判断して早々に壊滅したように見せかけて解散したんだ。正義側はそれにすぐ気付いたけど、雲隠れした悪の幹部を捕まえることは出来なかった。悪の幹部は素性を知られないようかなり気をつけていたからね』
ヒーローは自分の正体を隠すもんだけど、そりゃ当然悪も隠すかと一人納得する。
『それもただの解散って訳じゃなくて、一つだった悪の組織を幹部ごとに分裂して部下はそのまま自分の幹部の下について新たな組織

を幾つも創ったんだ。そうすれば仮に幹部が一人見つかっても潰れる組織は数あるうちの一つだからね』
話がだんだん難しくなってきがなんとかくらいつく。これ以上ややこしくなったら自信ないけど。
『でも悪はそこまでが限界だった。だってどんなに頑張ったところで正義にボコボコにやられた敗者だし。もちろん反撃する力なんて残ってないよ。だから悪は考えたんだ。どうすればこの状況から自分達が正義に勝てるかって』
「まあそりゃそうなりますよね。でもそんな都合のいい方法あるんですか？」
思わず言ってからしまったと思った。アルマジロが悪側だということは、今の俺の発言は喧嘩を売っているようなものだ。
『うん、その通りだよ。そんなものがあったら解散なんて奥の手使わないで戦いを続けてるだろうし。それでも幹部達が諦めないで正義に気付かれないように何回もの会議を長い月日をかけて行った。そして一つの結論をだしたんだ』
だけどアルマジロは気にしてないらしく話を続ける。
『自分達が不利になったのは正義ヒーローのインフレーションで、負けた決定打はＣａｌｌｉｎｇ　Ｅｎｄの出現。ヒーローのインフレーションに対抗したところでＣａｌｌｉｎｇ　Ｅｎｄが来たらお手上げだ。ならまずは対Ｃａｌｌｉｎｇ　Ｅｎｄ用の悪の技術や力を結集させた“切り札”を用意しようと』
尋常じゃないくらい嫌な予感がする。何がどうだからって訳じゃない。忘れてしまった過去の経験を体が覚えているのか、すごく嫌な予感がして寒気が止まらない。
『そこからまた長い年月をかけて色々技術を開発し、能力を見つけだし、力を探し求めた。でも正義側には探知能力に優れたヒーローもいてね。研究を始めてはすぐばれて組織が壊滅されるなんてことが日常茶飯事だった。それでも悪はなんとか研究を続けた』
おかしい、おかしすぎる。話の内容もおかしいが、それ以上に話の

流れがだ。この流れじゃまるで―
『そして僕達の代になってようやくＣａｌｌｉｎｇ　Ｅｎｄに対抗しゆる切り札を完成させた。その人物こそがそう、君だ』
「すみません実は自分勇者で魔王討伐のミッションの最中でした名残惜しいですがではこの辺で」
シュタッと左手を上げてスクリーンからダッシュで逆方向に走る俺。
「ぬぉわっどぅふぇっ！！」
始めの「ぬぉわっ」は想像以上に早いスピードが出たから。後の「どぅふぇっ」はすぐ壁にぶつかってしまったからだ。
『はははっ、面白いなぁ君は。この今時のご時世に勇者やら魔王やらいるわけないじゃないか』
「悪やらヒーローやら言ってる奴に言われたかねーよ！」
鼻を押さえながら未だ笑っているアルマジロに怒鳴る。こんな奴にはもう敬語はなしだ。
『まあまあ落ち着いて。まず始めにこの回りはすでに壁で囲ませてもらったから逃げ出せないよ。次に自分の想像以上のスピードが出ただろうけど、あれは悪の力のおかげだよ？ほら、冷静になってみれば壁にぶつけたところもほとんど痛くないでしょ。それは脚力や体やらを強化したからなんだよ』
確かに言われてみればあんまり、てか全然痛くない。・・・・・ん？
「ちょいと待て。それじゃまるで俺がもう改造か何かされてるみたいじゃないか」
『うんまさにその通りだね。おめでとう！君は悪の切り札に選ばれて様々な悪の勢力から様々な力を与えられたんだよ』
ビシッとアルマジロがこちらに向かって親指を立てる。やべぇ。恐らくマイペースで温厚なはずの俺が、悪魔超人も真っ青な考えつく限りの残虐な方法を目の前のアルマジロで試したくて仕方がない。
『何か満足いってない顔だね。何が不満なの？悪の切り札、いわゆる期待のエースってやつだよ？』
「その悪が嫌なんだよ！ちょっと考えたらわかるだろ！？」

もし仮に「正義の為に悪と戦ってくれ！」と言われても返事に困るのに、それが悪じゃノーウェイトでお断りだ。
『まあなっちゃったものは仕方がないし、文句聞くの嫌だから話進めるねー』
そう言ってアルマジロがリモコンらしきものをどこからか取り出し押してスロットらしき物体を操作しだした。が、我慢だ俺。先祖の忍の心を思い出せ。まずは怪しまれない程度に下手に出てあいつの話を全部聞いて情報を集めるんだ。結局悪の切り札とやらにされて体をいじくりまわされたってことしかわかってない。全部聞き出した後の状況次第であのアルマジロを好きにすればいい。俺は悪の切り札らしいからその力を使えば余裕だろう。あいつにハリケーン○キサーをかますのはそれからでも遅くはない。
『これでよしっと。それじゃあこっちを見てくれる？』
言われてスクリーンの中にあるアルマジロが押してきたスロットを見る。
『今から君のことを三つ決めるからね。僕が合図したらストップ！って大きな声で言ってよ』
何を決めるか鳥肌が立って仕方がないがとりあえず言われた通りにしよう。
『じゃあいくよ？スタート！』
アルマジロの声と共に一番上の枠のリールが回転している。わけがわからない俺はとりあえず適当にストップと言った。するとガチャン、と音を立てて止まる。そして一番上の枠には一
『おめでとう！これから君が名乗る悪の組織は“悪マジロ団”に決定しましたー！』
「ちょっと待てい！」
『何？悪いけどやり直しはきかないよ？悪の幹部が一人一票ずつ案を出してスロットは一発勝負の恨みっこなしって決めたんだから』
「そんな俺のいないところで決まったルールなんて全部無効だ！だいたい何だ悪マジロって！アルマジロを文字ってこれでもか！って

くらいダサい仕上がり具合じゃないか！」
『はぁダサくないし何言ってんのはぁ！？僕が悩みに悩みまくって捻り出した名前にケチつけないでよ！』
「まさかとは思ったけどやっぱ考えたのお前か！」
アルマジロが捻り出したのが悪マジロって全く笑えねーよ。
『それにこれは厳正なる抽選で決まったんだから文句はなしだよ！ほら次行くよ！スタート！』
そして今度は二段目が回転する。
「くっ・・・」
穴が空くほど一段目を凝視したが悪マジロの文字は変わってくれなかった。もう言いたいことが山ほどあるが、全部言ってたらきりがないし、ここは俺が大人になって堪えることにする。
『次は君の名前だよ。全く、何に決まるかは君の運次第なんだから受け入れなきゃ駄目でしょ？そう、これは運命なんだよ』
アルマジロが何やらほざいてるが俺は二段目を凝視する。まあ組織名だろうが名前だろうが何に決まっても無視すればいいだけ・・・なんだけど何故かどうしても気になってしまう。そして「ストップ」と言い、今度止まったのはー
「異議を申し立てる！！」
『はい却下です。厳正なる抽選の結果なんだから文句は無しって言ったでしょ？運命なんだから受け入れなさい。君の名前はディス・ティニ男です』
「だってイカサマじゃん！明らかイカサマじゃん！お前さっきまでやたら運命運命言ってたし！それにこんなダサいネーミングセンスの持ち主は百パーお前だろ！？」
『失礼な！確かに考えたのは僕だけど、ダサいと思うのは君がこの名前に隠された深ーい意味を知らないからだよ！浅はかな考えでこの名前を馬鹿にしないでよね！実は運命って英語でいうとディスティニーっていってね』
「はいアウトー！全然まんまだし隠さないで意味さらけ出しちゃっ

てるしお前のセンスはゼロだ！」
『この、言わせておけば！だいた・・・・・ちょっと待って』
急にアルマジロが耳に手を当てて黙る。その顔は不機嫌そのものだ。
『ゴメンお待たせ特別にもう一回抽選し直すことになったよはいスタート』
ぶすーっとして不機嫌なのを隠そうとしないままアルマジロが早口で言う。
「お、おう。俺としては願ったり叶ったりなんだけど。どうしたんだ？」
「苦情が入ったんだよ。二回連続僕の案が選ばれるのはおかしいって。イカサマしてるんじゃないかって」
アルマジロが俯きながら後ろで手を組みありもしない石を蹴るふりをする。てか拗ねすぎだろ、そんなにディス・ティニ男がよかったのか？俺には良さが全くわからないけどな。
「ん？てことは今、俺は悪の方々に見られてるってことか？」
『当たり前でしょ。なんてったって自分達の命運がかかってるんだから。そんなことより早くしてよ』
た、態度悪っ。これ以上話しても俺もアルマジロもストレス溜まるだけだろうと判断しコールした。
「ストップ」
回っていた二段目のスロットがガチャンと音をたてて止まる。そして今度止まったのは“不導定”。
「えーっと、何て呼ぶんだこれ？」
『“ふどうさだめ”だってさ。これなら絶対僕の考えた名前の方がいいだろうけどもう決まっちゃたから駄目だよ。後悔先に立たずだね』
ふふんとざまーみろ的な態度をしてくるがそれはないと心の中で断言する。確かに不動定とかぱっと見中国の地名っぽいし、読みは中学生が考えそうな名前だ。でもどう転ぼうが、ディス・ティニ男より悪くなることはない。

「わかった納得するよ。んで最後は何を決めるんだ？」
組織名を決めて次に名前を決めた。正直何も思い付かない。あれか？イメージカラーでも決めるのか？
『最後は一番重要だよ。なんてったって君改め不動定の能力を決めるから』
「・・・・・はい？」
『だから能力。雷だすとか風を操るとか』
「いやそれはちゃんと話し合って決めろよ！？俺まだ納得してないけど仮にも切り札だろ！？」
『だからこそだよ。確かに僕達幹部は君に詰め込めるだけ能力を詰め込むよ？でもそれには限界がある。これは人というＤＶＤに能力という情報を焼くようなものなんだよ』
アルマジロの顔なんてわからない。それでも真剣なのはスクリーンごしにもわかった。
『この場合大きく分けて二通りある。一つ目はそこそこの能力を複数与える。もう一つは強力な能力を一つ与える。この時点ですでに大モメだ。一つだと強力だけど弱点となる状況だとアウトだし、かといって能力落として複数にしても火力が足りなくて負けるかもしれない。だから意見が平行線で全然話が進まなかったんだ』
それに、とアルマジロは続ける。
『仮にどちらかに決まったとしても今度は何の能力を与えるかで争いになる。だって僕達悪は元々は一つだったけど数百年たった今では完全に別々の組織だもん。だから共通の敵の為に共闘してるだけであって仲間じゃないってこと。当然どの組織も自分達の組織が一番だと思って自分達の組織が編み出した能力を与えようとするよ』
まっすぐこっちを見るアルマジロ。理由はわからないが視線をそらすことが出来なかった。
『だからこその抽選なんだ。組織名や名前を決めたのもそう。どこの組織も贔屓しないで平等にする為に完全に新しい勢力として君を送り込むってことでね』

始めはこんな正義だの悪だのいう話、全く信じてなかったし今でも半分も信じられない。だから適当にあしらって情報を集めてからトンズラ決め込もうと思っていた。だけど、どうやら俺はかなりまずい状況に片足どころか両足をどっぷりつけてしまっているらしい。

『それじゃあ始めようか。一番重要な能力を決める抽選を。・・・・・・スタート』

そして最後の、俺の運命を決めるスロットが回り始めた。

「す、ストップ」

ここにきて初めて緊張で喉が渇く。

能力が何に決まるかというのもあるが、それ以上にこの後俺はいったいどうなるのか？という不安の方が大きかった。今まで通りガチャンという音と共に回転が止まる。そして停止したのは―

「・・・・・は？」

思わずそんな声が漏れてしまった。今までみたいなネーミングがダサいわけではない。あんだけ引っ張っておいて能力がしょぼかったわけでもない。ただ単純に、そして純粋に意味がわからなかったからだ。

なぜならそこにはただ一文字、“？”とあったのだ。

「これはどういう能力なんだ？」

アルマジロの方を見る。

『・・・・・・・』

しかし、あれだけお喋りだったアルマジロが無言で立ち尽くしているだけだった。それが俺には驚愕しているように見えた。

「お、おい。どうしたんだ？」

アルマジロのあまりのテンションの変わりように不安を覚えて尋ねる。

『・・・・・そっか。不動君はこれを引き寄せたんだね』

そして、ようやく口を開いたアルマジロは俺を完全に無視してそう

呟いた。
「な、なあ勿体振らずに教えてくれよ。いったいどうしたんだ？これはなんか能力なのか？」
恐怖に近い不安がじわじわと押し寄せて来る。知らないということはこんなに恐ろしいことだったのか。
『僕もそうしてあげたいけど、ごめん。もう時間だ』
「はっ？時間って何だよ？そもそも知ってることは何でも教えるっていったくせに俺のこと一つも―」
その後の俺の文句はおそらくアルマジロには伝わらなかっただろう。
何故なら
『ヴィーン！ヴィーン！』
「うおっ！？」
いきなり流れてきた大音量のサイレンに掻き消されたからだ。驚いて思わず体が硬直してしまう。そのサイレンに合わせて真っ白だった世界に赤いランプがチカチカしだした。
「なな、何が起こってるんだ！？」
先程とは比べものにならないほどの不安が津波のように一気に押し寄せてくる。何が起こっているか全くわからない。だけどこれから悪い事が起こるのだけは確実だろう。
『誕生の時が近いんだよ。だからもうお別れだ』
こんな状況にもかかわらず、落ち着いた声でアルマジロは言った。
「は！？誕生！？な、何だよそれ！？意味解んねぇよ！」
サイレンの音に負けないように叫びながら狼狽してキョロキョロと回りを見回す。するとずっと続いてると思われた真っ白の世界の地面が俺を中心に外から崩れていき真っ黒な闇に飲み込まれるように消えて行くのに気がついた。
「んなっ・・・！」
思わず絶句する。記憶喪失の俺でもわかる。このままだと死んでしまうと。
『うん、意味がわからないだろうね。でもこれからはもっと意味が

わからないことの連続になると思う』
「そんな訳のわからない説明なんていいから早く助けてくれ！悪を救う云々の前に俺が死んじまうよ！」
こうしている間にもどんどん真っ白な世界は崩壊し、俺の方へと迫ってくる。しかし、必死の訴えにもアルマジロは動じずに続ける。
『だけどこれだけは忘れないで。自分の道をまっすぐ歩くって』
「し、死ぬ！助けっ！」
そしてついに俺の足場が崩れ落ちた。
「く、くっそぉぉぉぉ！！」
空を飛べるはずもなければワープ出来るはずもない。俺は自分が死んでいくことに憤慨しながら、暗い暗い闇の中へと堕ちていった。

『本当に、頑張ってね。僕らの、最後の最後の切り札、――――――。』
アルマジロが最後に何かを言ったが、その声はスクリーンが闇に飲み込まれるのと同時に消えていった。

# 第1章　正義と悪と

初めから、おかしいと思っていた。

でも回りはそれが当たり前のように振る舞ってたので、おかしいのは自分だろうと言い聞かしていた。

それでも、ずっと、ずっとおかしいと思ってた。

その溜め込んでいた思いが“あること”がきっかけで爆発した。

抗った。

自分の持つ全てを賭けて抗った。

得るものは無く、次々と大切なものを失うばかりだったが、それでも自分の考えを信じて抗った。

――――だから刃をふりぬいた。

嫌な音がした。

全身から力が抜ける。

何が起こったかわからなかった。

それでも脳は飛びそうな意識の中「倒れるな」と命令を送る。

しかし体がいうことをきかない。
膝から崩れ落ちる。
ここでようやく気付いた。
あれは自分の額が砕けた音だと。
それに気付いたのと同時に――――
“彼”の正義も音をたてて砕け散った。

# 第01話　始動

記憶喪失な自分が覚えてる知識がある。それは高い所から飛び降りるとき、一番怖い時はどこか？という話だ。普通かどうかは知らないが、俺は地面とぶつかる瞬間だと思っていた。しかし実際は飛び降りた瞬間に恐怖のあまり気を失うのが大半で、地面にぶつかる瞬間に意識があることは普通ないらしい。それを今思い出した俺は声を大にして言った。

「普通って言葉は言い訳するときにも便利だなちくしょう！」

底の見えない穴へ落下しながら。

「死にたくないけどこんないつ死ぬかわからない拷問も御免被りたいね！」

叫びながらこの状況から抜け出す方法を考える。タイムリミットは地面に衝突して死ぬまでだ。まず、回りは真っ暗で何もなく掴まるとこがない。飛ぼうにも羽がない。

「くそっ、打つ手なしかよ！」

俺は絶望しそうになる心を奮いたたせる。諦めるな、諦めたら死ぬんだぞ！そう自分に言い聞かせて俺は必死に頭を働かせた。

のが1時間くらい前。いや時計とか持ってないから適当だけど。ん？今はどうなったかって？それに対する答えは簡単だ。まだ落下中だ。・・・・・・・・いや、嘘じゃないぞ？「1時間もずっと落下出来るほどするほど高い所なんてない」や、「1時間も落下してた

ら重力加速度の関係で空気抵抗がとんでもないことになって人間燃え尽きてるわ」など、嘘だといいたい理由が溢れ返っているのもわかる。でも、実際に起きてしまっているのだから仕方がない。あっ、この言葉自分が間違ってしまったときの言い訳に使えるな。とまあ始めこそいつくるかもわからない死の恐怖に泣きそうになったが、慣れとは恐ろしいもので今では困るのは風圧が邪魔なくらいで仰向けになってこんな馬鹿なこと考えている余裕があるほどだ。まあ記憶喪失＋有り得ない事の連続で感覚が鈍ってしまったのかもしれない。

「はぁ、いったいどうなるんだろなぁ」

ぽろっと出てしまった弱音。

瞬間、真っ暗だった世界が終わった。

「うおっ！」

暗い所から急に光に満たされた場所に来たせいで目を開けていられない。

そして、

「がはぁっ！！」

ずっと落下していた体が地面に激突した。肺の中の空気が全部押し出され、体が酸素を求める。しかし体が衝撃で硬直して息を吸うことが出来ない。そんな地獄のような数秒が過ぎ

「ごほっ！がはっ！はぁ！はぁー！」

ようやく息が吸えた。しばらく何もしないで息を吸う。それを繰り返すことで少しずつ気持ちが落ち着いてきて、体の感覚が戻ってきた。すると回りが異様なほど騒がしいことに気が付いた。

「いったい何なんだ？」

回りは落下の衝撃で砂埃がたっていて何も見えない。とりあえず体を持ち上げようとする。が、体が半分地面に減り込んでいて起き上がれない。試しに少し力を込めてみると意外と簡単に抜け出せてし

まった。体を動かしてみてもどこも異常がなく動く。そしてふと下を見ると地面には小さなクレーターができていて、それが落下の衝撃の凄まじさを物語っていた。
「ははっ、改造されてなんともまぁ頑丈な体になったもんだ」
あれほどの衝撃を受けても生きている自分を皮肉って立ち上がる。するとさっきよりも大きな歓声に加え、今度は指笛まで聞こえてきた。
「何かの祭か？・・・・・てちょっと待て」
自分で言っておかしい点に気がつく。仮に祭か何かをやっていたとして、俺は空から落ちてきた。そして地面にクレーターができるほどの落下をしたということは、大きな音もたっただろう。そんなところなら悲鳴はあがってもおかしくないが、歓声や口笛が聞こえてくるのはおかしい。
（どういうことだ？）
無意識に声を出すのを止めて考える。
「っ！？」
瞬間、爆発的に嫌な予感がし、俺は何も考えずに力任せに後ろへ跳んだ。
そして衝撃音。
何も考えずに力いっぱい跳んだら余りの勢いに止まれず、五十メートルくらい転がってようやく止まった。
「正義の鉄槌を避けるとは言語道断！悪は黙って裁かれなさい！」
体を起こしながら声のした方へ向く。すると、そこにはロッドのようなものを地面に突き刺して文句を言いながらポーズを決める身長１５０くらいのそりゃもう場違い極まりない少女がいた。小さな顔の中に真ん丸でくりっとした目と小さな鼻と口があり、黒い髪をポニーテールにまとめ、純白でけっこうな勢いで肌を露出させた白のライダースーツのようなものに身を包んでいる。続いて沸き上がる歓声。
「い、いったい何だ？！」

さーっと血の気が引く。だって俺、あそこでどいてなかったら死んでたってこだぜ？
「さあシャドウ！今度は外しませんよ！」
パニックで何が何だかわからない俺に少女が叫ぶ。そしてあろうことか突き刺さったロッドを引っこ抜いてこちらへ突進してきた。てか浮いてる！？
「ちょっ、ちょっと待ってくれ！冷静に話し合おう！まずはそこからだろう！？」
テンパりながらも俺は叫んで手を前に出す。
「問答無欲！とりゃあ！」
振り上げられるロッド。
「暴力は反たぬおわぁー！」
叫びながら今度は横に跳ぶ。ぶんっ！という音の後に大地が砕ける音がした。見てみるとさっきの攻撃の時より大きなクレーターが出来ている。
「洒落にならないって！俺を殺す気か！？」
「はい、当然そうです！その為の私ですから！」
「んなっ！？」聞いて絶句する。なぜなら明らかに俺より高校生くらいの女の子がはっきりと俺を殺すつもりだと認めたのだ。ロッドを肩に担ぎながら、何当たり前の事聞いてんだ？といわんばかりに。
「人は殺しちゃいけないって常識だろ！？」
「確かにそうです！ですがあなたは許されざる悪です！そもそもシャドウなので人ですらないです！」
「待て俺がどんな悪さしたよ！？んでもってシャドウって何だ！？」
「良く喋るシャドウですね！黙って正義に裁かれなさい！」
「展開早っ！？それに情報少なすぎだ！これ映画なら観賞者おいてけぼりだよ！」
少女は俺の戯言を無視して宙に浮きながら突っ込んでくる。振りかぶられたロッド。
「くそっ、これだからゆとりは！」

カルシウムとれカルシウム！と叫びながら俺はまた横に跳ぶ。だって俺にとれる選択肢はんて回避しかないし。反撃？無理無理。俺きっとフェミニストだっただろうから。ごめんなさい嘘です言い訳です本当はただ人殴る度胸がないだけです。とまあテンパってはいるものの、３回目なおかげか危機的状況だからか回避にも慣れ

『Ｏタイガー！』

声が聞こえた。

「は？」

始め何が起こったかわからなかった。もう着地しているはずなのに何故か今だに跳んだ勢いが止まらない。考えようとするが脳に酸素がいかず働かない。

「がぁはっ！！！」

遅れて腹を鉄の丸太でぶち抜かれたような衝撃が走る。ここでようやく相手の攻撃をくらって吹っ飛んだんだと理解した。

「ごっ！！がっ！！ごっ！！」

バウンドしながら地面を転がり、その度に口から血を吐く。

「ごっ！！がはぁ！！」

そして５度目のバウンドで何かにぶちあたり停止した。

「ごふっ！ごほっ！ごほっ！」

全身に激痛が走り、酸素を求めているのがわかる。しかし未だ上手く息が吸えない。口からは血が吐き出されるばかりだ。

「な！？まだ息があるのですか！？しぶといシャドウですね！」

だからシャドウって何だよ！？そう叫んでやりたいが言葉を返す余裕がない。

「まあ戦う力残ってないだろうし、今度こそトドメいきます！」

『おー！やっちまえー！』

『派手に頼むよアリスちゃん！』

俺は死にたくない思いだけでなんとか体を起こす。すると俺の目の

前に興奮した表情で大声をだしながら盛り上がっている老若男女がいた。
「たっ、助け、て、くれ」
記憶がない。勝手に悪の命運を押し付けられる。こんな不幸のオンパレードで、はっきり言って目覚めてからいいことなんて全然ない。
それでも、死にたくないという気持ちがあった。

力を振り絞ってすがるように手を伸ばす。が、何か透明なものに阻まれた。
（か、壁？）
回りを見渡す。そこで気付いたが、二百メートルほどの正方形の空間に俺と少女はいる。そのまわりに大勢の人が何やら興奮した表情で大声をだしながらこちらを見ていた。
（透明な壁か何かで囲まれてる？）
理由はわからないが自分は悪と言われ攻撃されている。それをこんな近くで見ていたら間違いなく危険なはずだ。それでも見ている理由は安全が約束されているか命知らずか。普通は前者だろうし、俺の前には透明な壁らしきものがある。それが周りを囲んでバリアーのような役割をして周りの人を守っているならつじつまが合う。
「これで決まり！」
「なっ！？」
こんな時に何考えているんだよ！馬鹿か俺は！？と自分を罵るがもう遅い。俺が余計な事を考えているうちに勝負は詰んでしまっていた。

目の前には少女。

振り下ろされるはロッド。

俺は死を意識し、恐怖に体が固まる。
俺は迫り来るロッドを動けずただ見ていると、脳裏にはあのアルマジロの事が浮かんだ。
記憶がない俺の走馬灯っていったらアルマジロとの絡みしかないもんなぁとどうでもいいことを考えながら俺は死
「てい」
ななかった。何故なら乱入者が現れたから。
「くぅ・・・！」
少女は顔を歪めながら大袈裟な程後ろに吹っ飛ぶ。恐らく自分から跳んで勢いをある程度殺したんだろう。少女は転がりながら５０メートルほど離れた位置で戦闘態勢に戻した。
「ふふっ、相変わらず趣味の悪い武器に格好ねアリス。鈍器で戦うライダースーツの魔法少女ってどうなの？」
俺を助けてくれた乱入者が嘲笑うように言う。
その人は身長１７０弱くらいの女性。切れ長で少し釣り上がり気味の朱の瞳と黒い眉、すっとした鼻筋と少し薄めの唇。腰の辺りまである長い黒髪はゴムで後ろに無造作にまとめられている。少し相手を威圧しかねない容姿をもつ彼女は堂々とした態度によりさらに強調されている。そんな彼女は跳び蹴りをロッドを振り下ろしていた少女の脇腹に見事食らわせてくれたおかげで俺の頭は助かったのだ。
「ルカーニア・・・！！」
蹴られた少女（二人の会話からアリスと判明）が片膝をついたまま俺を助けてくれたルカーニア（同じく二人の以下略）を睨む。それはまるで親の敵を見るような目だった。
「裏切り者がどのつらさげてやって来たんですか！？」
「無視して話進めるなんて冷たいわね。友達無くすわよ？」

「黙りなさい！貴方はもうシャドウと同じ私達の敵です！覚悟！」
アリスがルカーニアのもとへ跳び込む。瞬間、ルカーニアが消えた。
「な！？」
何処へ行ったんだ！？と俺は驚くが、アリスの方は驚いた様子もなくただ悔しそうに唇を噛んでいるだけだった。
「悪いけど今回は急いでいるから。じゃあねー」
急に後ろから声がしたかと思うと、ボンッという音と共に辺りが真っ白の煙に包まれる。
「んごっ！」
続いて後頭部に衝撃。そうして俺の意識いきなり遠退いていった。

「ぐへっ」
思わず変な声を出してしまう。理由は簡単、何か衝撃を受けたから。反射的に目を開ける。すると青い空が見えた。そして自分が仰向けに横になっていることがわかった。とりあえず体を起こそうと腹筋に力を入れる。
「いててててっ・・・・！」
すると腹に激痛が走った。そこで先ほどアリスとやらに攻撃されたことを思い出す。今気づいたが、改造されて落下の衝撃ですらなんとか耐えた体が、あの少女の攻撃では吐血して身動きとれないほどの激痛に襲われた。てことはあの少女はとんでもない力をもっているんだな。　とりあえず体を起こすのを諦めた俺は、涙目のまま辺りを見まわす。どうやらここは路地裏らしく、回りにはビルが立ち並んでいる。そしてある方向をみると、先程俺を助けてくれたおそらくルカーニアさんとやらであろう背中が見えた。その背中はどんどん遠ざかっていた。

「ちょっ！ちょっと待ってくれ！」
急いで大声を出す。するとまた腹に痛みが走った。
「・・・・・」
しかし彼女はノーリアクション。この距離でこれだけの大声だから聞こえてないということはないだろう。ということは無視されているということだ。
「待ってくれってば！そこの女の人だよ！なあ！？」
腹の痛みを我慢して、さっきよりも声を張り上げる。
「・・・・・何？」
すると彼女はかなり不機嫌ながらもようやく振り向いてくれた。その表情に一瞬怯みそうになる。
「さっきはありがとう。おかげで助かった」
が、それを堪えて急いで俺は立ち上がって頭を下げた。腹の痛みで泣きそうになったのは秘密だ。
「・・・・・それだけ？」
「へ？」
頭を上げる。すると彼女はその綺麗な顔をさっきよりびっくりするぐらい不機嫌に歪めていた。
「わざわざそんなつまらないこと言う為に呼び止めたのかって聞いてるの。どたまカチ割るわよ」
暴言とともになんかすごい睨まれているんですけど。あれ？さっきと性格違うくない？
「いや、実は」
今からさっきの事聞こうとしたんだけど、考えてみればどう説明すればいいんだ？馬鹿正直に「悪の切り札なんです」なんて言ったら本当に頭カチ割られそうだ。
「何？」
待たされるのが嫌いなのか、さっきよりもさらに不機嫌になっている。というよりこれは不機嫌通り越して憎しみに溢れてる。
「いや、実は俺記憶喪失みたいでさ、過去の記憶がないせいかイマ

イチ現在の状況、というより情勢か？まあとにかくほとんど何もわからないんだ。だから厚かましくて申し訳ないんだけど知っていることあったら教えてくれないか？」
だから俺は思い切ってずばっと聞いてみた。うん、嘘は言ってない。けっこう重要な事も言ってないけど。
「・・・・・」
何故か黙り込む彼女。どうしたんだ？・・・・・あっ。
「ごめん、自己紹介がまだだったよな。俺は―」
不導定と名乗ろうとしてふと気付いた。よくよく考えたらこの名前、名乗らなくてもよくないか？確かに記憶がないから名前も覚えてないが、勝手に、しかもスロットなんかで決められた中学生が考えそうな名前を馬鹿正直に名乗る必要もないだろ。かと言って特に名乗りたい名前なんてないしどうしたもんかなぁと悩んでいると、

彼女の刀が左肩を貫いていた。

「・・・はっ？」
まず沸いて出たのは疑問。
「がぁぁあぁあっ！！」
続いて走る痛み。俺は反射的に後ろへ下がる。すると刀が抜けて鮮血が噴き出した。
「ぐうううぅ！！」
肩を抑えてうずくまる。すると上から声が聞こえてきた。
「勘違いしているみたいだから教えてあげる。私はあのすかした正義のヒーロー気取り共の思い通りにしないためにあなたを連れ出しただけ。だからあなたがどうなっても構わないの。例えば左肩の風通しがよくなってもね」
顔を上げる。そこには無表情でこちらをみる彼女がいた。
「だからここから先は好きにしていいわよ？でも私の邪魔をするならスポンジみたいに風通しが良すぎる体になってもらうけどね」

文句を言う気は起こらなかった。俺は彼女のその雰囲気に飲まれてしまったから。
「じゃあさようなら。二度と会わないことを願っているわ」
そう言って彼女は去って行く。その背中を俺は眺める。そして完全に見えなくなったとき、
「・・・くそっ」
俺は壁に寄り掛かって座り込む。
「くそっくそっくそっ」
痛む左肩を抑えることも忘れて俺は右で拳を作り地面を叩く。
「これはいったい何なんだよ、俺が何をしたよっ」
あまりにもめまぐるしく変わる状況にもう何が何だかわからなくなった。
「・・・・・こんちくしょう」
そして全てに対して悔しくなり、俺は息を殺し、少しだけ泣いた。

「よーし！気分を入れ替えまずは現状確認！」
くよくよしたところで現状が変わるわけでもない。今はこのままでは死ぬ現状をどうするか考えるべきだ。そう自分に言い聞かせ、泣いてすっきり俺は一人で気合いを入れて今までを振り返ることにした。

?俺は記憶喪失で何処だかわからないとこにいた。
?そこで出会ったアルマジロが言うには俺は悪の技術を結集させた切り札で、なんかめっちゃ期待されている。
?んで組織名・悪マジロ団と、名前・不導定という名前、最後に能力が『?』と決めらてこちらの疑問が何も解決してないのに下に落

とされる。
?しばらく落下しまくった後、ようやく何処かに出てきたかと思えばライダー少女（名前はおそらくアリス）に悪やらシャドウやら言われ殺されかける。
?そんなとき現れた女性、ルカーニア（こっちもおそらく）に助けてもらうが勘違いすんなと左肩刺されて去っていく。
?んで現在に至る。

「駄目だ。さっぱりわかんねぇ」
情報が少な過ぎる。ここでじっとしといた方が安全なのかもしれないが、死ぬまでずっとそうするわけにもいかない。左肩はまだ痛むが出血は悪の技術のおかげか元々の人の身体能力のおかげかもう止まっている。俺は痛みを堪えて立ち上がり辺りを歩いて情報を集めてみることにした。
「それにしても綺麗だな」
路地裏といえばゴミが散乱して汚いイメージがあるが、ここはそんなことはなく異臭もしない。
「おっと、そんなこと考えたそばからゴミ発見っと」
ゴミといっても大きな姿見用の鏡が壁に立てかけられているだけなんだけどな。俺はなんとなしに鏡の前に立つ。

するとそこには右上が中心のずれた十字が書かれた仮面を付けた全身黒ずくめの男がいた。

「・・・・・」
無言で振り返る。誰もいない。前に向き直り、鏡に向かって手を振る。すると向こうも全く同じタイミングで手を振った。
「心から信じたくなかったけどやっぱ俺かよっ！？」
いや確かに今まで自分の姿を確認したことなかったけどさ！さすがに気付こうよ俺！そりゃこんななりしてたら悪って言われて命狙わ

れるわっ！いや不本意ながら俺実際悪の切り札だけどさ！・・・・・・
はぁ、嘆いたところで後の祭り。とりあえず仮面を取って素顔を見てみよ
「・・・・・んん？」
うと思ったんだけど、仮面は外れない。
「ぬぉぉぉー・・・・・！」
全力で力を込めてみたものの、仮面はびくともしなかった。
「はぁ、はぁ、はぁ、どうすりゃいいんだよ・・・・・」
マントも試すが結果は同じ。こんな姿じゃかなり目立つし、なにより俺が恥ずかしい。俺は何かないかと体をまさぐる。
「ん？」
すると腰の右辺りにスイッチらしきものを見つけた。
「何だこれ？」
おそらく改造された時につけられたのだとは思うが、用途が全くわからない。
「まぁとりあえず押してみるか」
深く考えずに軽い気持ちで押してみる。するとカチャっという音が鳴った。・・・・・だけだった。しばらくじーっと待ってみるが反応はない。
「・・・・・えっそれだけ？」
音が出るだけっていったい何の機能だよ？これじゃ食べ終わった弁当箱に入っているバランの方がまだ使い道あるぞ。
と思った瞬間。

『プログラム起動します』

脳内に直接響くような声が聞こえた。同時に画面が脳内に現れてその画面に『ＮｏｗＬｏａｄｉｎｇ』という文字があり、その下にあるパーセンテージの棒が０から１００に向かって伸びていく。イメージとしては３Ｄの映像を脳内にぶち込まれてそれを第三者の視点

で見ているような感覚。意味がわからないだろうけど、俺も訳わからないからこの説明で我慢してくれ。そしてしばらく待っているとメーターが１００まで貯まる。
『マスター、不導定が認証されました。次回起動時からは意識的な起動が可能になります』
そんな音声が流れた。もちろん俺は訳がわからない。
『チューニングの前に配下雇用の手続きを先に行って下さい』
そう音声が流れた後、画面には何やら説明画面が現れた。ちょっと読んでみると配下雇用手続きと書かれた題の下に何かの手順が書かれていた。
「どうやって操作するんだ？」
試しに変われー！と念を送ってみるが変化はなし。ずっと同じ画面が映っている状態だった。
「・・・とりあえず進めてみるか」
これが何かの手がかりになるかもしれないし、配下ということは現状を知っている仲間が来てくれるのかもしれない。そう思った俺はとりあえずやってみることにした。
「まずはっと・・・うへぇ、これを地面に書くのか？しかも血で」
脳内ディスプレイには何やら訳のわからない絵のような文字のような物が書かれていた。これがいわゆる魔法陣とかいわれるやつなのか？
「まあやると決めたし頑張るか。えーっと・・・おっ、あそこがいいな」
見つけたのはこの路地裏をさらに奥に行った突き当たり。そこの死角になるところに調度いいスペースがっあった。ここなら誰にも見つからないで作業が出来そうだ。俺はその死角に行く途中で置かれていたビールビンのケースからビンを一本取り出した。
「とりゃっ」
そして着いてからビンの口をもって壁に強めに叩きつけて割る。するといい具合に尖って危ない感じになった。

「さてと、問題はここからだよなぁ」
俺は恐る恐るビンの割れ目に右の人差し指を押し当てる。
「いてっ」
すると鋭い痛みが走って血が出てきた。
「これでよしっと。んじゃいっちょ頑張りますか」
そして俺は黙々と魔法陣（？）を書き始めた。・・・・・のだが、
「むむ、ぬぬぬぬぬ・・・」
5分が経過、結論。めっさ難しい。何が難しいってまず人差し指でこんなややこしいの書くのもそうだし何より自分の血でというのがネックだった。だってガラスで切ってもすぐに血が止まるし。じゃあ深く傷つけろ？馬鹿なこと言うな逆に止まらなくなったら怖いだろうが。へたれ上等、安全第一が今決めた俺のモットーだからな。
「てか書いている途中で貧血で倒れたりしたら恥ずかし過ぎるなこれ」
路地裏の死角で四つん這いになって仮面をつけたマントの男が血で何かを書いている。シュールここに極まりって感じだな。そんな馬鹿なことを思いながら作業を進めること更に３０分後。
「あーやっと出来たー」
ついに完成した。
「よしっ、この後はっと・・・ふむふむその円の真ん中に左手を置く」
言いながら左手をペタッとつく。少し刺された左肩の痛みがぶり返したが気にせず続ける。
「次に右手に刃物を持つ、と。これ、ガラス瓶の破片でも大丈夫だよな？」
少し悩んだが、まあやってみて無理なら考えようと決める。あれだ、ビバ、ポジティブシンキングってやつだ。
「最後にその左手に刃物を突き刺すっと」
そして俺は右手に持った破片を左手に突き
「刺せるかぁぁ！！」

もといツッコミを入れた。
「俺はそんな馬鹿じゃないし度胸もないしなによりMじゃねぇ！」
いくら改造されたとはいえ痛いものは痛いわ！さっきも刀で刺されて痛かったし！何考えてんだよ！？叫び疲れた俺は肩を上下させながら息を吸う。そして脳内文字を読見直してみたがやはり間違いではなかった。しかし、
「・・・・・ん？何やら続きがあるな？」
読んでみる。
「えーっと、追記・これを行うことに抵抗はあるでしょうが痛みはほとんど伴いません。か」
何だ？このとってつけたような補足は。逆に怪し過ぎるわ。痛くない理屈が書かれてないし、「ほとんど」っていう言葉もひっかかる。
「・・・・・でも、信じてやるしかないのか？」
脳内ディスプレイには『チューニングの前に配下雇用の手続きを先に行って下さい』の一点張りだ。ここで止めてしまったら何をすればいいのかわからないふりだしに戻ってしまう。
「くそっ、最後の補足間違ってたらあのアルマジロぶっとばしてやるからな」
目をつぶり、深呼吸をする。とくっとくっとくっと自分の鼓動が速くなっているのがわかる。
「ええい、ままよ！」
覚悟を決めた俺は目を見開く。そして半ばやけくそ気味に破片を握った右手を振りおろした。

## 第０２話　一難去って崖っぷち

「くっ・・・・・」
あまりの大音量に頭痛がし、あまりの光量に目が潰れるかと思った。
そして時間にして１分程だろうか。ようやく視力が回復し始めて、痛む頭を押さえ立ち上がった。
「つつっ。いったい何が起きたんだ？」
眼前には、ていうより辺りには大量の煙。はっきりいって何も見えない。さっきもこんなことあったななどと考えているときに思い出した。
「そうだ！俺の手！」
先ほど破片を突き立てた左手を見てみると、そこには少し切れた跡があるだけだった。
「はぁ、よかったー」
安堵からため息つく。そのとき、一迅の風が吹いた。
「おっナイスタイミングだな」
その風に連れ去られて行くかのように煙が吹き飛ばされて行き、
「な・・・・・！？」
そして俺は絶句した。
それは、生き物としては異常な３つの顔。
それは、禍々しいまでの真っ白な体毛。
それは、すべてを引き裂るような尖った歯。
それは、射殺さんばかりの鋭い眼光。
そして、その体を怒りにふ、震、震わ・・・・・。ごめん、やっぱ無理。何とか怖く表現しようとしたが無理だった。
だって、真っ白なふわふわの毛並み。
可愛らしくちょこんと出た八重歯。
まんまるで潤んだ瞳。

そしてぷるぷる震える姿はまごうことなき――――――チワワだった。頭が3つあることを除けばだけど。
「ち、チワワって・・・」
思わずあからさまにため息をついてしまう。だって悪の切り札の配下雇用って言うぐらいだからもっと厳つい怪獣やら悪魔やらを想像してたのに、出てきたのは顔が三つの子犬サイズのチワワ。これはあんなに覚悟して頑張った成果としてはつりあってないでしょ。
「チワワですけど何か？初対面で失礼なご主人っすね」
「うおっ！チワワが喋った？！」
そんながっつり失礼なことを考えていると、とても澄んだハスキー気味のボイスでチワワが喋った。
「訂正します。ものすんごく失礼なご主人っすね。呼び出したのあんたでしょーが」
犬の表情なんてわからないけど、声からチワワはかなり怒っているのがわかる。
「そ、そうか。そうだよなうん。すみません、俺がが悪かったです」
呼んだのはこっちなのに文句を言うって向こうにしてみたらかなり気分悪いよな。そう思い、頭を下げながら謝る。相手が年上か年下かわからないのでとりあえずは敬語で。
「・・・・まあいいっすけど。んで用件は契約でいいんすか？」
チワワは無表情？なままで聞いてきた。
「契約って、『配下雇用』のことですか？」
「それ以外に何かあるんすか？」
うっ、まだ怒っているのか対応が冷たい。
「いや、ないと思いますけど・・・。それで配下雇用って何なんですか？」
「はい？」
チワワは何に聞いてるんだこいつは？みたいな顔をした後にはっとした。
「失礼ですけどご主人、名前は？」

「あーっと、そのー・・・」
聞かれて答えるのをためらってしまう。やっぱあの名前名乗るの嫌だなぁ。
「決めてないんですか？」
「いや、決まったんですけど・・・・・って、え？」
『決めてないんですか？』と言う聞き方はあまりにもおかしい。だって名前というものは生まれた時に決まっているものだから。
「決めるべきことは決めたけど、説明すべきことは時間が足らなくて無理だったってことですか」
そして1人ぶつぶつと考え込むチワワ。今聞こえた独り言はそのまま俺の先ほどの状況と一致する。ひょっとして、俺の事情を知っている？
「あーめんどくさいですねー」
チワワは前足で器用に自分の真ん中の頭をかきながら大きめの声でそう言った。
「失礼しました。まず自己紹介させて頂きます。自分、雇用専用悪魔のケルベロスです」
そう言ってだるそうに三つの頭を下げるチワワ。顔三つある時点でケルベロスとは思ったけど。それよりも気になることがある。
「雇用悪魔って、俺、何か取られたりするんですか？」
他にも俺の現状のこと知ってるっぽい話とかいろいろ聞きたいことはあったが、まずは自分の命最優先だ。いわゆる願い叶える代わりに魂よこせーみたいな展開になられたら非常に困る。
「その心配は無いっすよ。これは悪の組織と我々悪魔全体の契約が済んでますから」
「え、えっと・・・」
「物分かり悪いご主人っすね。ようするに我々悪魔のお偉いさんとあんたら悪の組織のお偉いさんが契約したんすよ。あんたら悪の一人一人に一体の悪魔を配下として貸してやるってね」
「え？それじゃあ完全にこっちが得してません？」

だってこっちは借りてるだけだ。
「当然その分の見返りはちゃんと貰ってますよ。でもその見返りってのを説明しだすとまた話長くなるんで、とりあえず持ちつ持たれつの契約がされてるってことで了承してください」
「わかりました。あっ、遅れてすみません。俺の名前は、その、不導定と言います」
ここに来てようやく自分の名前を名乗ってなかったことに気付く。思わず不導定と名づけられた名前を名乗ってしまったが、他に名乗る予定の名前もないしまあいっかと前向きに考えた。
「はい、不導さん。まずは自分を選んでいただき有難うございました」
再び頭を下げられる。
「あの、選んだっていうか選択すらしてないんですけど」
何か自分は選んでないのにそう言われると申し訳ない気持ちになって答える。だって俺がやったことといえば、脳内の言葉に従っただけだよな？
「意思という意味ではそうっすけど、無意識という意味では選んで頂きました」
「はい？」
何だそのとんち話は？
「えーっと、配下雇用の手順で最後自分の手の平に刃突き立てたじゃないですか？」
「はい、しました」
「あのときにもう選択が行われてたんすよ」
「へ？」
意味がわからずぽかんとしてしまう。
「えーっと、例えばわかりやすい例をだすと、右手を刺すのか左手を刺すのか。一気に刺すかそーっと様子を見ながら刺すか。そんな選択の連続で数いる雇用悪魔の中から自分が選ばれたんですよ」
「理屈はわかりましたが、全く納得が出来ないんですけど」

そんなことで本当に結果が変わったりするのか？ぶっちゃけ半信半疑な俺。
「まあ簡単に説明すると、それだけ召喚というものはデリケートなんすよ。それにまあわからないなら別にそれでもかまいやしませんよ。納得してもらったからといって何か変わるわけでもないですし」
清々しいくらいばっさりと切られた。
「んで、重要なのがここから。この配下雇用なんすけど、拒否することもできます」
「拒否？」
「はい。いくら選択したといってもそれは無意識に行ったもの。ですのでもし自分のことが気に入らないならデータベースから再検索できるんすよ。今度は完全に自分の意思として」
「で、データベースって？」
さっきから自分は知らない単語を尋ねてばかりなのでちょっと恥ずかしかったりする。でも今まで知らないことずくしだから少しでも情報は得たい。
「文字通り全雇用悪魔が記されてるデータっすよ。通販みたいにそっから好きなの選んでくださいーって訳ですよ」
「なんかえらい所帯じみた例えですね」
「例えなんてわかりやすさが一番ですよ。んで、どうするんすか？」
「その前に最後にもう1つ質問いいですか？」
「どーぞ」
相変わらず態度が冷たいが気付かなかったことにする。
「そのシステムって何で始めから好きなの選ばせてくれないんですか？無意識の選択なんてすっ飛ばして。そっちの方が手っ取り早いですよね？」
「貴方が特別なんすよ。本来データベース引っ張ってきて選ぶなんてこて出来ないんです。さっき話した悪と悪魔の契約上ね。でも今回は貴方が特別だということでそれで特例として了承してるんすよ。もちろんその特例に対しての見返りもちゃんと貰ってます」

「そ、そうなんですか」
今になって初めて悪の切り札らしい優遇をされたのを実感してちょっと嬉しかったのは内緒だ。
「質問は以上っすか？なら早く決めて欲しいんすけど」
「はい、じゃあこれからお願いします」
頭を下げる。
「こちらこそよろ・・・・・ってはい？」
「え？えーっと、ケルベロスさんが俺の雇用悪魔ってのになってくれるんですよね」
名前をまだ聞いてなかったので、とりあえずケルベロスさんと呼ぶことにした。
「まあ不導さんが自分を選んでくれるならそうっすけど、他の中から比較して選ばなくていいんすか？いや、自分としては早く決まったし選んでもらえたしで願ったり叶ったりなんすけど」
「いや、だって親切だったし」
「親切って。・・・・・失礼ですけど、実は頭おかしい人だったりします？」
「本当に失礼ですね」
思ったからといってよくもまあストレートに聞けたもんだ。
「いやだって・・・・・まあ決めて頂いたからどーでもいいっすね」
言いかけてケルベロスが折れた。あっ、今めんどくさいって思ったな？
「それでは改めまして、自分に決めて頂いてありがとうございます。雇用悪魔のケルベロスです」
「あの、それはわかったんですけど名前は？」
「いやだからケルベロスっすけど」
「へ？ケルベロスって種類じゃないんですか？」
「三つも顔ある犬がそう何体もいたら気持ち悪いでしょ」
うわぁ、自分で言っちゃってるよこの人。いや犬。
「話を進めますよ？では正式な雇用悪魔になるための儀式をさせて

もらいます」
「儀式ぃ？」
思わず顔をしかめる。さっき血で書いたみたいにまた面倒臭いことしなきゃいけないのか？
「そんな顔しなくても大丈夫っすよ。ちょっと血を貰うだけです」
「え？血を貰うって？」
それってどうやって？と聞こうと思ったけどその心配は無かった。
何故なら
「ガプ×３」
三つの口に噛まれる俺の左手。
「んぎゃー！！」
当然すんごい痛みが走った。
「はい、ごちそうさまでした。いい血液してますねご主人」
「痛てぇ！ひょっとしたら今までで一番痛てぇ！」
噛まれた左手を抑えながら走り回る俺。ライダースーツの少女にやられた方が威力はあったが、あちらは命にかかわりすぎて痛みとかいう次元じゃなかったし、刀でばっさり切られたのは綺麗に切られたのか案外早く傷が塞がったしここまで喚くほどではなかった。
「ちょっと血吸われたくらいで煩いっすよご主人。器の小ささがばれるっすよ？」
「器が小さい前提で話を進めるな！だいたい左手怪我してるの見たらわかるだろ！」
「ここで右手を噛んだら両腕怪我じゃないっすか。どうせなら片方にいっぺんにやった方がいいでしょ？」
「俺は怪我してない方を噛めと怒ったんじゃない！怪我人だから躊躇しろと怒ってるんだ！」
「そんなことりご主人」
「そんなこととは何だ！？悪いことしたら謝るのがー」
「敵に囲まれました」
「礼儀・・・・・はい？」

瞬間、響き渡る爆音。そして俺の体は吹っ飛んだ。
「んな！？」
驚きのあまり体が硬直する。
「がはぁ！」
壁に叩きつけられたことで走る衝撃。そしてようやく俺の体が動き始めた。
「ケルベロス！無事か！？」
今まででの非日常で慣れたのか直ぐに状況が飲み込めて、とっさに抱え込んだケルベロスを見る。
『お蔭様で。いい反射してるんすねご主人』
すると脳内に直接のんきな声が聞こえてきた。
「うおっなんだこれ！？」
『さっき血を貰って契約完了しましたからそのおかげですよ。攻撃くるんで右に跳んでください』
「くそっ！！」
言われたとおり跳ぶ。すると遅れて自分がいた場所に何かが通過。そして物が破砕する音がした。
『脚力も申し分ない。さすが悪の切り札っすね』
「おいおいふざけてる場合じゃないだろ！？」
『んじゃ真面目に。今から逃げ道確保するんで時間稼ぎよろしく頼みます』
俺の腹にいたケルベロスがピョンと飛び降りて爆風によって舞った煙に消えていった。
「時間稼ぎって、ちょっと待・・・っ！？」
俺が言おうとした先の言葉は口にあてられた何かによって遮られた。
「この絶体絶命の危機にお喋りなんて随分と余裕なのね。それともただの馬鹿なのかしら」
犯人は着物を着込んだ長髪の女性。黒い髪に真っ白の肌。そして黒の瞳はかなりの美人のはずだが何故か酷く恐ろしく見えた。
「始めまして坊や。“北”を統括してる由来(ゆら)よ。よろしくね」

口に当てられてたのは手の平。当然返事も出来ず、俺はひとまず状況を確認するため辺りを見渡した。
「残念だけど逃げようとしても無駄よ？ここを中心に半径３０メートルを囲んじゃったから。“巻き込まないよう”にね」
怪しく笑う女性。先ほどケルベロスが「敵に囲まれた」と言っていたからおそらく本当だろう。
「それじゃあさっそくだけど、始めましょうか？」
何を？と聞く余裕もなかった。喉が焼け付くような痛みが走ったから。
「ーーーーっ！！」
口を塞がれてるので叫び声が出せない。鼻から息を吸えば更に痛みはます。俺は逃げだそうと暴れる。が、壁を背に抑え込まれている俺の体はびくともしなかった。
（俺の馬鹿力でびくともしない！？）
「さあ、坊やは何秒堪えられるかしら？」
始めは激しく痛んだ喉の感覚が急激になくなっていき、体全体の感覚が鈍くなる。そして暴れる力もなくなっていく。女性の声から笑っているのがわかるが、すでに視界が霞んできているので確認出来ない。
「ーーーーー」
でも、死ぬ訳にもいかない。
（びくともしないなら――――！）
朦朧とするなか、俺は最後の力を振り絞ろうと構える。そして、
「無駄よ坊や。貴方は死ぬ運めー」
全力で後ろにもたれかかった。
「なっ！？」
崩壊する壁。そりゃそうだ。改造されて馬鹿力になった俺をも抑え込む力だ。そんな力と俺の力と合わせれば壁の一枚や二枚、簡単に突き抜けるだろう。
「はぁー、はぁー」

抜け出せたのはいいものの、このことに気付くのが遅過ぎてかなりの体力を奪われたようだ。喉の感覚はないしせき込みもしない。そのかわりにひどく体がだるかった。
「やってくれるじゃない坊や。元気な子は好きよ」
壁の崩壊で砂埃がたち、女性の姿が朧げにしか見えない。その隙に俺は状況を確認した。
・現在、敵に囲まれている。
・ケルベロスが時間を稼いでくれと言ってどこかに消えさる。
・目の前には戦闘態勢の和服の女性。（十中八九俺より強い）
・俺のダメージは内臓、左肩、左手、肺。
・俺の選択肢は、戦う・逃げる・降参する・話し合うの４つ。
「本当ですか？信憑性ダダ低いんですけど」
そして最後に、俺は言われた。『今から逃げ道確保するんで時間稼ぎよろしく頼みます』と。出会ってまもないし、顔が三つあるチワワで頼りない。喋り方も少しずれててどこか緊張感がない。
「あらショック。信じられない？」
女性が構えるのがわかった。例え戦ったところで勝つ、いや、生き残る確率はゼロに等しいかもしれない。
「そりゃ会ってすぐ殺されかけますし。俺、人見知り激しいですし」
俺はすがってるのかもしれない。騙されてるのかもしれない。でも、行動を起こさないと現況は変わらない。――――――信じないことには、始まらない。
「あら、私はその人見知りのハードル楽に越えられるくらいあなたがお気に入りよ？そう、捻り潰してしまいたいくらいにね」
というわけで、ケルベロスを信じて足掻こうか。生き残るために。
俺は構え、力を溜める。視界を遮っている煙もだいぶんおさまっている。
「そんな歪んだ愛情、クーリング・オフでお願いしま、っす！」
視界が完全にはれる前に俺は溜めた力を爆発させた。先手必勝、玉砕覚悟。戦闘経験の浅い俺が相手に何かを仕掛けられたらおそらく

何をされたかもわからずお終いだ。凄まじいスピード、それを実現させる脚力。大地を踏み締めるたびに地面が割れていく。
「ーーーぁあ！！！」
そして影に向かって殴りかかる。すると、女性は鏡が割れるようにパリンと音を立てて割れた。
「くそっ！」
何がどうなったかはわからないが、倒せてないのだけは理解した。大地が割れたせいで建物の中に再び煙がまったが、俺は攻撃を仕掛けた勢いで建物の中から出る。そのおかげで視界が完全にはれて、正面にいる女性を捉えることが出来た。
「ただの拳が必殺の威力。さっきの脱出といい、稀にみる強さのシャドウね。ますます気に入ったわ」
手を掲げる女性。そこに現れたのは先の尖った細長い凍りの塊。いわゆる氷柱だ。
「アリスは運がいいわ。あの子じゃおそらく貴方の相手は早そうだし。でも貴方は運がないわね。だってあなたじゃ私の相手はまだ早いわ」
女性が氷柱を掲げたままふらふらと揺れる。向こうの動きを待ったところで戦闘経験の浅い俺が合わせることは難しいだろう。なら、先手必殺。
「・・・・・はっ！！」
先ほどと同じように突っ込む。フェイントなんて知らない。俺に出来るのは、ただ全力で最速の攻撃。右の拳を握り込み、振り抜くための動作に入る。瞬間、
「はーいご主人、時間稼ぎご苦労様っす」
「どふぅっ！！！」
場違いな声と同時に、突如目の前に現れた扉にぶつかり停止した。
「あら、戦いに水を差すなんて不粋なわんちゃんね」
「そりゃそうでしょ。自分のご主人が死ぬとわかっている戦いを黙って観戦するような馬鹿じゃないんで」

いつの間にか俺の足元に現れたケルベロス。それと女性が何やら言い合っているが、俺は痛みに悶絶して転げ回る。だって全力で最速で走って扉に突っ込んだんだぜ？痛みは無限大だ。
「残念だけど、この包囲網から逃げ切るのは不可能よ？」
「ならおめでとうございます。あなたは今から不可能を可能に変えるのを目撃できますよ？では」
そして俺の前にあった扉が引き戸のように俺の方とは逆に開いた。
「しっ！！」
同時に扉に向かって投げられる氷柱。
「数多！」
そして女性が叫んだ瞬間、その氷柱は大量の数に増えた。
「んなっ！？」
「Ｄｏｏｒｓ（ドアーズ）」
俺が向こうの攻撃に驚くのをよそに、ケルベロスが冷静にそう言うと俺達の真下の地面に扉が出現し、押し戸のように開いた。
「それではご機嫌よう」
今度は俺が驚く暇もなく、重力のままケルベロスと共に扉へと落ちて行った。

「お待たせいたしました」
「どうだった？」
「申し訳ございません。何処に逃げたのか全く掴めません」
先ほどあのシャドウの坊や達に逃げられた現場で、やってきた部下

から報告を受ける。
「そう。なら、悔しいけど向こうのわんちゃんが凄いと認めるしかないわね」
こちらのメンバーは緊急だったため、私のではなく全員レンタルのメンバーだった。だけど抜かりはなくその数２０名。その中には探知系の能力者を念のため５名もいれておいたので、先ほどわんちゃんに言った「不可能」は誇張表現ではなく事実を言ったつもりだ。が、それでも振り切ったというのは称賛に値する。いや、振り切ったというよりは消え失せたの方が正しいか。何せこちらはあの扉に入ってから気配すら掴めていないのだから。
「にしても、未知数の恐ろしさね。私、怪我なんて久しぶりにしたわ。やっぱり定期的に現場に出るべきかしら」
自分の力は客観的に見れているつもりだ。なんていったってこれでも北を任されている一人だから。そんな自分は、しばらくのブランクがあったといえかなりの力があると自負している。
「まさか一撃でここまでとはねー」
そんな自分の左手をみる。そこには真っ黒に焼け焦げた左手。あのわんちゃんはこちらの攻撃をすべて無効化し、さらにこちらの左手を潰したのだ。おそらくこの手はもう使い物にならないだろう。それに、とあのわんちゃんと契約者であろう先ほどのシャドウの坊やを思いだす。二度も正義の追手から逃げることが出来たシャドウなんて何年ぶりであろう。
「さーて、まずはこの手を治してもらいにあの子のとこ行かなきゃ」
「準備は出来ています」
「そう。じゃ、行きましょうか」
「はっ」
足元からジワジワとにじり寄ってくるような、拭いきれぬ不安感を吹き飛ばすかのように明るく言ってその場を去った。半径５０メートルほどのえぐり取られたかのように何も無くなり焦げた大地。そう、あのわんちゃんによって一撃で地面もろとも焼き尽くされた大

地を。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3676j/

---

悪役≪ヒール≫の花道

2010年10月11日03時06分発行